
The smile in Michaelmas daisy

hylo?corvus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The smile in Michaelmas daisy

【Nコード】

N3828M

【作者名】

hylo?corvus

【あらすじ】

このストーリーはkinozuka様の東方プロジェクトの性転換キャラクターを
使わせて頂き書いたオリジナルストーリーです。このようなジャンルに拒否感を感じる方は観覧を御控え頂くようお願いいたします。

このストーリーは博麗霊夢と八雲紫の過去、そして因縁を描いたファンタジーです。全体的にシリアスな展開となりますが、少しでも楽しんで頂ければと思います。

感想、意見、指摘等がありましたら、宜しければお願いいたします。

. p r e f a c e f e l o n (前書き)

I , m f e l o n .

I n e v e r f o g i v e b y h i m .
I n e v e r r u n b y f a t e .

N e v e r d e m i s e r e p e n t

I k n o w .

I t ' s j u s t m y w o r d .

I t ' s . . .

m y s i n .

・ p r e f a c e f e l o n

あいつは言った

咎は咎められ、苦しんで初めて産声を上げると

痛みは苦しみの種が、心の澱に沈みし涅の内で、芽を出すからこそ初めてそれに気付くと

哀しみは、その逃れられない痛みを怖れ、覆い隠してしまったことで、

出口をなくした痛みが、恐れ、逃げ惑い、そして打ちひしがれた姿を自分自身と気付いた時、
心のどこかで孵った咎を哀しみだと知ることだと

この言葉が示す意味を

俺が知ることはなかった

あいつが俺にはじめて話したその時から

二度とそれが叶わなくなるまで

あいつは、それ以外を残さなかった

最後の時まで

もう俺に知る術など無いのだろうか

もし真実を知った時

俺に何ができるか

俺は

一体誰なのか

一度だけでいい

教えてほしい

せめて

憎しみに染まりきる前に

落ちてしまっ前に

. p r e f a c e f e l o n (後書き)

a m . t h e n . . . i n s o m n i a c o m i n g i n d r e

・ the fallen (前書き)

I lost just myself .

The fate ignored my soul .

But fate is right .

Please . . .

punish me . . .

my flesh , my shameful soul
my weak , my heat

I fall

I fall

I'm fallen

I fallen must vanish .

I know . . .

. like the judas . . .

・ o t h e f a l l e n

風が泣いている

その嘆き悲しむ叫びは、在る筈の無い壁に打ち当り、また違う叫び
声へと変わっては、鳴き声の渦に落ちていく。
そして何重にも重なり、奏でられる、その「うた」は何時しか目の
前を覆い、続べ尽くしていた。

何時か見た、深く、暗い、星も消え失せた空。
俺はその空の上に佇んでいる。

足場には所狭しと敷き詰められた灰色雲の群れ、
上には、灯りひとつ無く、冷たく黙り込んだ、見慣れた街。
向き返っているのは世界なのか、それとも俺なのか、そんな事はど
うでもいい。

知ったところで別にどうするつもりも無いのだから。

風は泣き止まない。

それは疎らに、すすり泣いたり、耳を打ち破るかの様に叫び続けた

りしている。

何が悲しくて泣くのか、何となく解る。

きっとそれしか出来ない、この世界の下で何も出来ない俺と同じ様に。

そんな風が歌うどうしようもない「うた」が、しきりに俺を撫で、叩く。

俺は少し瞬きをした。

それにつられてか、袴、羽織、髪、それを束ねる結び紐までが騒ぎ立てる。

それらの騒ぎ声も、瞬きの微かな溜息も、

風の泣きべそにつられ、他の風に紛れ、墜ちていく。

すると俺は、ふと気が付き、足元に目をやった。

足場の雲が流れている。

だが、気付いた時にはもう遅かった。
雲は風の「うた」を拒絶するかのように全て流れ去ってしまふ。

堕ちる

あの不気味な空の胃袋の中に飲み込まれる

俺は息をのむ

しかし、用意された筋書きは違った。

雲は全て流れ去った、
足場など既がない。
空に墜ちるだけだ。
なのに何事もなく、俺は空の上に立っていた。

案の定な筋書だ。

俺は静かに前に踏み出す。

踏み出した足は、音すら発せず、在る筈の無い足場を踏みしめる。それから俺は、何時消えるかも知れない足場を、確かめながら、静かに、ゆっくりと歩き出す。

何時しか、風の泣き声が笑い声に変わっていくように思えた。

途方もない空を歩いていく。

どれだけ歩いても辿り着く当てなど無い。
そして疲れ果て、足を止めることも無い。
何も変わらない。

仮に上に敷き詰められた街の景色が変わっていたとしても、遠すぎて何が変わったのか等、分かるわけがない。

ただ、少しだけ見てみたいと思った。

変われることを望んだ訳じゃない。

ただ少し、

見てみたいだけだ。

俺は手を伸ばし、錆びついた街を背に、目の前に翳してみる。
だが空を掴んだと言うには、惨め過ぎた。

その時、風の「うた」が、俺にはもう笑い声にしか聞こえなくなっていた。

もう、呆れ笑うしかなかった。

限りなく性悪なこの世界を、

そして、このどうしようもない世界の中で、自分の望みの1つすら、
まともに叶えられない無力な俺自身を。

でも、そんな世界でも、仮にも、すべてのものがその運命を背負ったとしても、

あいつは、きっと笑っていられたのだろうか。

何時だってそうであった様に、

例え、その運命すらを歪められ、

全てを悪戯に狂わされようと。

なあ

あんたは、俺といられて、笑えたのか。

いや

答えをなくした問いかけに、意味なんてあるはずが無い。
無いんだ。

俺は余りにも無力な手を諦めたように下ろした。

しかし、俺は気付いてしまった。

その手の下ろす先に重なる面影があることを、

そしてその面影こそ、俺が思い続けたあいつの背、そのものであることを。

腰までをも、この薄暗い世界に引き込んでしまつぐらいに、混じり気の消え失せた黒い長髪、
その闇そのものであるかのような髪からちらつかされる、暗い蘇芳香に染まつた羽織袴、
出鱈目に靡く、くすみがかつた鳶色の帯や紐、

そうだ、

その姿は俺の記憶に焼き付いているあいつ以外の何者でもない。
違うはずが無い。

そして俺はあいつの名を呼ぼうと声を込める、

あいつに気付いてもらうために、

しかし何故だ、

どんなに叫んでも、この世界には全く声が生まれようとしな
い、幾ら叫んでも、この世界に在るのは絶えず打ち付けられる、風の悲鳴と「うた」だけだ。

俺の声は、音もなくしゃがれ、萎み、蹲っていく。この時、初めて俺の体が痛みに蝕まれていることが分かった。

体の重みが突然にして増し、骨肉が下にずり落ちそうになる。

やがて痛みが頭を支配し始め、抗う間もなく、焼け爛れる様な痛み以外、解らなくなった。

痛い

耐えられないほどに

怖い

死ぬ

もう駄目か

怖い？

何が？

痛みが？

死か？

だからなんだ。

そんなものがか。

一番怖いのはあいつの方だ。

俺に突き付けられた痛みなど、あいつの痛みの欠片にも及ばない。
俺が全てを狂わせた、全て奪われた、あいつの苦痛に比べたら。

今、行くから。

俺は、体を飲み込もうとする痛み抗いながら踏み出す
痛みを押し殺そうとすればするほど、その痛みの嵩は増していく。
それでも俺は足を止めない、
止める訳にはいかない。

あいつが気付くまでは、

あいつが振り返るまでは、

そしてあいつの下へ辿り着くまでは、

それまでは、

あと少しだけは、

何かが震える気がした。

俺は気付いた。

あいつが何かを悟ったことを、

やっと、

ようやく、

あいつは俺のことに気が付いてくれた。

俺はそう信じた。

やっと会える。

やっとあいつに、

そして

違う

何かが違う

この震えが訴えているのは、もっと別の何かだ
何時か感じたことのある

次第に俺の中が騒つく。
やがて、確信は徐々に姿を変え始める。

そして俺は知ってしまった

これは

突如何かが体を覆い、絞め付ける。

肺と耳に何かが傾れ込み、息を妨げ、

今まで聞こえていた音たちが、うねりに掻き消される。

そして、もがくも苦しさに考えを奪われる中、

俺は、ただ必死に目を上にやる。

錆びついた街が歪み、波紋を打っている。

そして、まるで呻きをそのまま模った様な泡沫が、

歪みに飲まれ、消えていく。

震えの意味、それが恐れだと分かった時に感じた足元が抜けるような感触

そうだ

空に墜ちたんだ

考えが悉く奪われていく中、

俺が持っていた、たった一つの答え

そしてその意味は

俺自身への紛れもない罰

当然の報いだ

俺は咎められて当たり前のことをした。

俺はあいつから運命を奪ったんだ。

不条理な事など何も無い。

苦しみを受けるべきは、俺だけなんだ。

意識が手元からすり抜けていく中、

微かに保たれる視界に、水が濁りゆくのが映る
やがてその濁りは、無数の手のような「影」「へと姿を変え、
まるで、飢えに任せるかの様に俺に纏わりつく。

もう抗う気など無い。

これでいい

その筈なんだ。

そう言い聞かせながら、俺は静かに目蓋を鎖し、
その「影」に取り込まれる事を受け入れる。

なのになんて

俺が鎖しきろつとした瞳に映ってしまったんだ

あいつまでもが、その「影」に取り巻かれ、呑み込まれていく光景が

何故だ

罰を受けるはずなのは俺のはずなのに

元凶は俺なんだ

なのになんで

なんであいつまで、こんな目に遭わなければならない。

俺はただ必死に手を伸ばす。

既にあいつは「影」に取り込まれ片腕しか見えない。

「影」に届かないと分かっているけど、そんな事は、どうでもいい。

もう

あいつを苦しめたくない

ただそれだけなんだ

なのに届かない。
そしてあいつの最後の片腕が呑み込まれた。

俺の中で壊れる音がした

もう

何も感じない

伸ばしていた手は力を無くし、うなだれる。
そして俺も「影」に取り込まれていき、
闇に閉ざされる。

視界も、感覚も、意識も、

闇に墜ちていく。

もう

もう、あいつを苦しめたくはなかったのに

ごめん

本当に

本当にごめんなさい

兄さん

霊葵

・ o t h e f a l l e n (後書き)

消エルハ泡沫 現モマタ 泡沫ニ消ユル

ソノ真

知ルハ誰カ

即チ

主トテ触レラレヌ林檎ノ様ニ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828m/>

The smile in Michaelmas daisy

2010年10月9日13時25分発行